

### 3 国際コミュニケーション学

藤田 高弘・岡村 明  
 斉藤 真子・野田 真里\*

【抄録】 合同授業とグループ別に加えて、それぞれのグループ間の合同授業による文化比較（言語 宗教文化 美術 など）の中から、異文化との共生に必要なものや諸問題を考えるために、外国人留学生を招いて交流会を持ち、国際コミュニケーションのあり方を考える。

【キーワード】 学び合い 留学生 交流会 コミュニケーション 異文化理解 言語 宗教文化 美術

#### 1. はじめに

新教科「国際コミュニケーション学」では、世界の多様な文化（自国の文化を含め）や文化の背後にあるものの見方・考え方について理解し、疑似体験や学び合いを通し異文化との共生に対する感性と寛容な心を高め、異文化間におきる諸問題に柔軟に対応し行動する力を育成することをねらいとしている。

このようなねらいを達成するために、平成15年度より、1クラス40名を3つのグループ（日本・英米・韓国）と分け、それぞれのグループを3人の教諭（国語・英語・美術）が担当して、言語・生活・表現についての授業を少人数で展開してきた。平成16年度では、各文化のベースとなる宗教文化についての授業を加えるとともに、言語・生活を一まとまりにして学習内容を絞った。また2グループが共通テーマを学習をする合同授業を増やし、教え合いの場面をつくり他グループとの知識の共有を進めた。

3年目をむかえる今年度の重点目標は、次の3点とした。

- 1) 2グループ合同授業での知識の共有や他文化との比較をより活発に進めるために、授業内容をより精選する。
- 2) 3グループ合同授業で外部講師による直接的な体験や講義の導入を効果的に実施する。

3) 担当教諭の教科（美術）を国際コミュニケーション学に生かす。

1) に関しては、昨年度より行っている2グループ合同授業の中で授業のねらいをより絞ることによって、討論したり・振り返ったりする生徒の活動時間を増やした。授業については、昨年度は、それぞれ単独授業でおこなっていた授業内容を凝縮して他グループとの共有をおこなったが、今年度は、他グループの授業内容との関連性を意識し、共通して学ばせたいねらいを明確にして1時間の授業を組み立てることにした。具体的には、昨年度は英米・韓国合同授業において、授業の前半部に世界で使われる英語の多様性、後半部にハングル語入門というように、2つの内容を並べただけであったものを、今年度は共通して学ばせたいねらいとして「言語の特徴とコミュニケーションへの影響」に絞り、グループ間の関連性を重視した授業内容にした。

2) に関しては、留学生との交流会（3グループ合同授業）を言語・生活面の単独授業と2グループ合同授業が一通り終わる時期にした。この時期にした理由は、異文化の学習を深めれば深めるほど、その文化に対する固定した思い込みをしがちになるので、言語・生活面の授業で学習したことが正しいものかどうかを確認したり修正したりするのに適した時期と考えたからである。また、同時に日本の文化が外国人の目から見るとどの様に見えるのか、日頃の我々の生活が外国人にとってどのよ

新教科 国際コミュニケーション学 —これってヘン？アタリマエ？— 4/28/2005  
 前期授業案予定

全体 野田先生	斉藤先生	岡村先生	藤田先生
4月15日（金） 全体説明15分 希望調査05分 1 展開	オリエンテーション 斉藤グループの説明 5分 日本のところを探る	オリエンテーション 岡村グループの説明 5分 コリア面白発見	オリエンテーション 藤田グループの説明 5分 英米文化を探る +全体説明 5分

\* 中部大学助教授

4月22日(金) 1展開	異文化コミュニケーション合同ワークショップ *異文化社会をサバイバルする *カルチャーショックを乗り越える		
5月06日(金)	日本の生活・美の様式1	韓国・英米の言語表現 (合同)	韓国・英米の言語表現 (合同)
5月13日(金) 予備日(スポーツテスト)	日本・英米の言語表現 (合同)	韓国の生活・美の様式1	日本・英米の言語表現 (合同)
5月27日(金)	日本・韓国の言語表現 (合同)		英米の生活・美の様式1
6月03日(金) 1展開	英米・韓国・日本 ⇒ 木の文化・石の文化(美術的な内容)		
6月10日(金)	特別授業1 留学生との合同交流会・発表会or討論		
6月17日(金) 1展開	合同交流会の振り返り+ 日本の生活様式2	合同交流会の振り返り+ 韓国の生活様式2	合同交流会の振り返り+ 英米の生活様式2
6月24日(金)	特別授業2 宗教文化入門のキックオフ講義(仏教を中心に)(野田先生)		
7月01日(金) 1展開	日本の宗教文化1	韓国・英米の宗教文化 (合同)	韓国・英米の宗教文化 (合同)
7月08日(金) 1展開	日本・英米の宗教文化 (合同)	韓国の宗教文化1	日本・英米の宗教文化 (合同)
7月15日(金)	日本・韓国の宗教文化 (合同)	日本・韓国の宗教文化 (合同)	英米の宗教文化1
9月02日(金)	宗教文化の振り返り+ 夏休み探求課題の説明	宗教文化の振り返り+ 夏休み探求課題の説明	宗教文化の振り返り+ 夏休み探求課題の説明
9月09日(金)	比較合同発表会の準備		
9月16日(金) 1展開	グループの文化比較・コミュニケーション比較合同発表会 「地球社会で生きるのに大切な態度や価値とは何か」		
9月30日(金)	振り返りと総括・アンケート		

うに感じるのかを理解する場ともした。さらに後に行う宗教文化の授業につなげていくための内容にも配慮した。

3) に関しては、国際コミュニケーション学の授業では、言語・文化面に強い国語・英語の教師の専門性が授業に生かしやすい面がある。しかし、美術担当教師にとっては、過去2年間、韓国語・韓国文化についての教材研究に時間がとられ、担当教科をコミュニケーション学の授業に生かすことが不十分であった。今年度については、美術の教科を生かす試みとして、3グループ合同で、『西洋と日本の美意識や自然観の違い』についての授業を行った。

1)～3)を今年の重点目標として、次の表のように全体計画を立てて実施した。

## 2. 授業の実際

### (1)韓国・英米の言語表現(5月6日実施 韓国・英米2グループ合同授業)

ねらい 英語と日本語、韓国語と日本語を比較し、言語の特徴(発音・語順・敬語表現)についての基本的な知識を理解し、言語に表れるものの考え方・コミュニケーションの仕方の違いに気づかせる。

#### ①英語の特色、音声・語順

- ・strengthという英単語の日本語読みと英語読みを比較し、子音・母音・音節といった言語の発音に関する基本的知識を整理させた。
- ・句、文として発声する時の特徴について、日本語と英語を比較し、pitch accent(音の高低)とstress

accent (音の強弱) の違いを理解させた。

- ・語順についての特徴を日本語と英語の比較を通して、ものの考え方やコミュニケーションの仕方の違いを考えさせた。

②ハンゲル入門 (ハンゲルの発音・語順・敬語表現)

- ・ハンゲルの発音と読み方を体験し、音節数の多さや激音・濃音などの韓国語の発音の特徴を理解させた。
- ・日本語との類似点 (発音や語順や助詞) を理解させ、韓国語に親しみ、興味関心を持たせた。
- ・身内を他人に紹介する際の敬語表現を取り上げ、絶対敬語 (韓国語) と相対敬語 (日本語) の違いについて理解させた。

③英語、韓国語、日本語の比較

- ・英語、韓国語、日本語を発音、語順、敬語について特徴を整理比較させ、類似点・相違点に気づかせる中で、言語による思考の仕方やコミュニケーションの仕方の違いを理解させた。

生徒の振り返りより

- ・「英語を話す人たちは、先にどう思うかを言うから、すごいハッキリした民族に感じる。逆に日本人はもったいぶっているように感じる。」
- ・「英語圏の人にとっては、日本人が曖昧な言い方と思われる。」
- ・「日本語は語順が違ってても助詞があるからある程度通じるけど、英語や特に中国語は別の意味にとらえられる可能性がある。韓国語は『お母様がいらっしゃいます』みたいに身内のことを他人に知らせる時にも絶対敬語を使うので、まちがえて変なことをいったらマズイと思った。」
- ・「英語は強弱をつけて話すので、もしアメリカ人が日本語を習った時同音異義語の『はし』をどう発音するのかな。」
- ・「英語圏の人は物事をはっきり主張することを大切にしている。それに対して日本語は曖昧に思われるかも。韓国は目上の人に対する尊敬の気持ちが日本より強いのでは。」

言語に表れる思考やコミュニケーションの仕方の違いについての感想が述べられ、外国の人と会話する時に配慮することを言語の視点から気づかせることができた。また、世界の言語の特徴 (発音・語順・敬語表現) を理解させることもできた。さらに一歩進み、語感や語彙数の違いからくる誤った思い込み (優劣感) を正し、健全な言語観を身につけさせる素地となるような工夫が必要になると感じた。

(2)留学生との合同交流会 (6月10日実施 日本・英米・韓国グループ合同授業)

ねらい 世界の様々な国の留学生との交流・討論を通して、今までの異文化の学習で湧いてきた疑問を

確認させる。逆に、留学生の目からみた日本文化の疑問点を挙げてもらい、生徒にその疑問に対しての説明をさせることによって、実践的なコミュニケーション能力を身につけさせる。

①自己紹介を兼ねて各国の挨拶を自国の言葉で言ってもらい、国あてクイズをおこなった。

「ニーハオ」、「アンニョンハセヨ」は生徒もすぐに中国・韓国とわかったが、「スラムツパギ」(インドネシア)・「ブナズィウワ」(ルーマニア)は、聞いたことがなく、服装や体型や肌の色から推測して様々な国名をあげた。言葉が分からなくても生徒の既存の知識から国籍を推測していき、授業の導入部として生徒の関心を強く引きつけた。

②留学生からみた日本の生活習慣、言語、表現のここがヘン

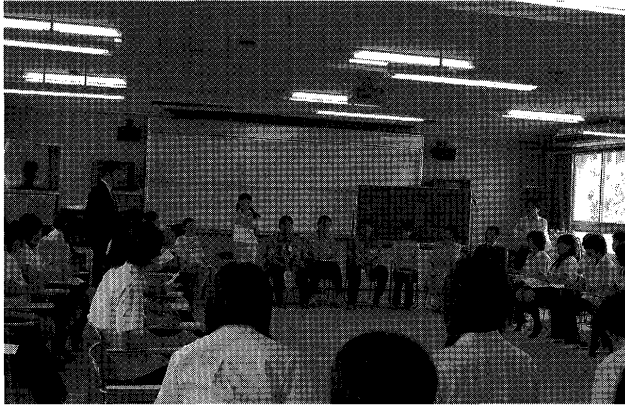
中国の留学生は、電車の中で化粧をしている女の人がいることや高校生のスカートが短いことをおかしいと指摘した。生徒たちは、「全ての高校生がしているわけではない」や「ファッションとして楽しんでいる」と説明した。

ルーマニアの人からは、上履き・下履きの区別をつける日本の習慣に馴染めず、自分で上履き用のハイヒールを用意して履いていることを示した。生徒からは、「日本では、スリッパを履きます。」という声があがり「日本文化には浄・不浄があるから」とも答えていた。

日頃日本ではあたりまえと思っていることが実は、外国人から見るととてもヘンなことであることを知ることができ、価値観や習慣を相対的にとらえる姿勢が身につけてきた。

③外国人に対して、日本の年末年始の宗教イベントの混在を説明させた。

小グループに別れ、日本人が年末年始にかけて、クリスマス (キリスト教)・除夜の鐘 (仏教)・初詣 (神道) と様々な宗教的なイベントを行うことを外国人に説明した。「企業が商品を買わせるため。皆もそれによって楽しむから。」「日本人は宗教心からではなく、皆と楽しく過ごすため」と説明に苦労していた。日頃、日本であたりまえと思っていることほど外国の人に説明する難しさを感じていた。また、宗教心にあまり縛られることのない生徒が外国人に日本人の宗教観を説明する場面では、日本の宗教とは何かということを改めて見つめ直す機会になった。



留学生との交流会 挨拶と自己紹介



小グループで宗教についての討論会

(3) 「石の文化と木の文化」(6月3日実施 日本・英米・韓国グループ合同授業)

ねらい 西洋と東洋の造形物・材料・加工方法・道具・道具の使い方(運動特性)の比較を通して、美意識や自然観の違いを理解させる。

①材料の使われ方による文化の違い

- ・西洋美術史の典型的な様式の建築物をとりあげ、名称当てをして導入とした。
- ・日本と西洋の建築物について、石や木の材料がどのように使われているかに着目させ、建築の主材料の違いに気づかせた。
- ・建築の構造や材料が、気候風土や材料の入手しやすさなどに関係していることを理解させた。

②道具と運動特性の違い

- ・トムとジェリーのマンガにでてくる鋸を使う場面を見せ、西洋の鋸と日本の鋸の形状や使い方(押して切る、引いて切る)の違いを気づかせた。
- ・欧米、中国、日本のかんなの形状とその使い方(押して削る・引いて削る)から、西洋人と日本人の運動特性の違いについて考えさせた。
- ・サーベルと日本刀、鋤と鍬についての使い方を想起させ、道具がそれぞれの文化の中で民族の運動特性に合わせて発達したことを確認させた。

③やすりの文化とのみ(刃物)の文化 西洋と日本

- ・やすりがけの原理から、西洋人の自然物(木)に対する姿勢や思考を推測させた。
- ・のみの使い方から、日本人の自然物(木)に対する姿勢や思考を推測させた。
- ・やすりの文化とのみの文化の違いから、自然観の違いを理解させた。

④斧に見られる自然観の違い

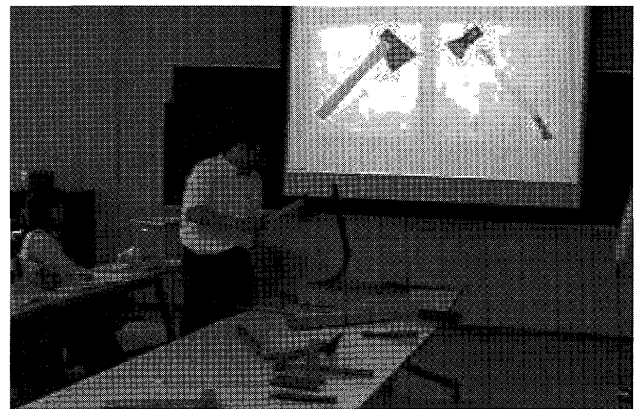
- ・日本の斧と西洋の斧の写真を見ながら、斧身の筋模様に着目させ、その筋模様の有無が何を意味しているか考えさせた。
- ・三本の筋模様、四本の筋模様に込められた日本人の自然に対する恐れや感謝の気持ちを考えさせた。

⑤庭園に見られる美意識の比較

- ・ベルサイユ宮殿と竜安寺石庭の写真と比較して、美意識の違いについて考えさせた。
- ・抹茶茶碗や書院造りの床の間等の写真から、質素で不均衡なものの中に美を見いだす日本人の美意識について考えさせた。



日本古来の木工用具を見ながら



斧に表れる自然観の違い

生徒の感想より、

- ・「自然に対しての考え方の違いは、それだけにとど

まらず人々の考え方にも通じていると思う。道具の使い方に押す、引くというのがあるのには驚いた。そういう考え方が欧米の人は積極的で、日本人はあまり思いを口にしないという傾向につながっているんじゃないかと感じた。」

- ・「道具の使い方に押す、引くというのがあるが、欧米の人が積極的なものに対して、日本人は引いて遠慮することが多いのではないかと感じる。なんか考え方も似てるみたい。」
- ・「美意識の違いで西洋は豪華・均整美で自然を征服する感じだけど、日本は質素・不均衡な美で自然に融合する感じ。西洋人は格好とか華やか。日本人は性格とか生活も質素だし、ご飯も質素なので表れている。けど、最近は日本人も外国のまねをするのでわりと格好とかハデだけど。」

全体的にスライドのプレゼンテーションと道具の実物を見せて理解をさせる授業の中心であった。せっかく道具を準備したので、引く・押すの違いを体験させたり、石のみで砕いたりという体験をさせるべきであった。その方が、自然材料と対峙し文化を造ってきた人間の知恵と苦勞を肌で感じ取らせ東西文化の違いをより実感させる授業になったと思う。道具を使って材料を加工させる体験の場面を取り入れて授業を組み立ていく必要を感じた。

### 3. 成果と課題

#### (1) アンケートの結果

2005.9.30、授業最終日に、高2 全員にアンケートを実施した。( )内の数字は質問に対して、肯定的な意見を選択した生徒の割合である。( )は2003年度[ ]は2004年度【 】は2005年度

1. 一つの授業に複数の教員が関わることにより、様々な視点から知識が得られると思う。  
(62%) [77%] 【80%】
2. 学校外の先生の授業では経験的、専門的な知識が得られると思う。  
(82%) [88%] 【93%】
3. 様々な問題が入り組んだ現代の社会問題に関する知識が得られたと思う。  
(57%) [74%] 【85%】
4. 新教科で扱ったような「答への出にくい問題」について学習することは大切だと思う。  
(81%) [82%] 【90%】
5. 新教科で学習した問題に対して自分の意見や考えを持つようにしている。  
(69%) [73%] 【75%】
6. 新教科で学習した知識を活用し自分の意見を組み立て自分なりの考えを持つようにする。  
(54%) [62%] 【64%】
7. 一つの大きなテーマを3つのグループの視点から多角的に考えることができると思う。  
(50%) [73%] 【69%】
8. 一つの課題を深く分析したり、幅広くまとめたりする機会になると思う。  
(67%) [79%] 【70%】
9. 新教科の授業を通して、自分の教養が深く広くなると思う。  
(77%) [81%] 【83%】
10. 新教科の学習が、これからの自分の進路選択や自分の生き方の助けになると思う。  
(34%) [36%] 【40%】
11. 新教科で学んだことを現実の生活や社会で役立てようと思う。  
(52%) [55%] 【58%】
12. 新教科で学んだことをこれから自分が直面する問題や社会問題を考える際に活用していこうと思う。  
(62%) [64%] 【74%】
13. 新教科で学習した内容について自分の問題意識が高くなると思う。  
(52%) [65%] 【67%】
14. 新教科の学習では知識のみでなく、体感することができ関連する事項への関心が高くなると思う。  
(39%) [65%] 【66%】
15. 新教科で学習した内容に関連する既存の教科学習の内容も深く学ぶようになると思う。  
(25%) [40%] 【35%】
16. 少人数で学習したため疑似体験など多様な活動ができると思う。  
(61%) [73%] 【76%】
17. 新教科の学習を通して、学び方の多様性が身に付けられると思う。  
(55%) [61%] 【69%】
18. 3つのグループの中から選べるのが意欲的に取り組むことにつながると思う。(52%) [64%] 【63%】
19. 新教科で一つのテーマを詳しく学んだことが、既存の関連する教科(例、英語、国語)を意欲的に取り組むことにつながると思う。(21%) [29%] 【27%】
20. 新教科で学習し他教科の学習時間が減って他教科の学力が低下したと思う。  
(20%) [20%] 【9%】 参考そう思わない 【68%】
21. 新教科は週1回では足りないので増やして欲しい。  
(12%) [17%] 【13%】 参考そう思わない 【54%】
22. 新教科を週1時間学ぶより他教科の学習がしたい。  
(24%) [26%] 【12%】 参考そう思わない 【60%】
23. 総合人間科より新教科のほうが、学習の目的がはっきりしていると思う。  
(19%) [35%] 【43%】
24. 総合人間科の方が自分のペースで深く学習することができると思う。  
(63%) [36%] 【38%】
25. 新教科は総合人間科以外の他教科より、友人や教員などの「人と学びあう」機会が多いと思う。  
(57%) [71%] 【61%】

2005年度の国際コミュニケーション学のアンケート結果について、2003年から2005年度の3年間の傾向をみると以下の四つのパターンになる。

A 上昇型 (15項目) 1,2,3,4,5,6,9,10,11,12,13,14,16,17,23  
2005年度に8割から9割の生徒が肯定的な評価をした

項目は、「1 様々な視点から知識が得られる 2 学校外の先生の授業では経験的、専門的な知識が得られる 3 現代の社会問題に関する知識 4 新教科で扱ったような「答への出にくい問題」について学習することは大切だ 9 自分の教養が深く広くなる 16 少人数で学習したため疑似体験など多様な活動」の6項目である。

「12社会問題を考える際に活用 13自分の問題意識が高くなる 7 学び方の多様性」は7割である。2004年度より全般的に肯定的な評価が多くなっていることが分かる。

また、2004年度と同様に、「14新教科の学習では知識のみでなく、体感することができ関連する事項への関心が高くなる」((39%⇒65%⇒66%))を生徒は評価している。

B 凸型(8項目) 7,8,15,18,19,21,22,25

「7一つの大きなテーマを3つのグループの視点から多角的に考える 8一つの課題を深く分析したり、幅広くまとめたりする機会になる」は2004年度に増えたが、2005年度には7割の生徒に落ち着いた。「15既存の教科学習の内容も深く学ぶ」は4割。「18 三つのグループの中から選べるのが意欲的に取り組むことにつながる」は6割。「19既存の関連する教科(例、英語、国語)を意欲的に取り組む」は3割。「25友人や教員などの「人と学びあう」機会が多い」は6割である。

「21新教科は週1回では足りないので増やして欲しい」は1割で、「そう思わない」のは5割である。

「22新教科を週1時間学ぶより他教科の学習がしたい」は1割で、「そう思わない」のは6割である。

C 下降型(1項目) 20

「20新教科で学習することにより、他教科の学習時間が減って、他教科の学力が低下」は2004年度の2割から1割に半減した。一方「そう思わない」のは7割である。既存教科との関連性を評価することは増えて、生徒の意識に新教科の授業が必要なものとして位置づけられていることが分かる。

D 凹型(1項目) 24

「24総合人間科の方が自分のペースで深く学習できる」は4割で、生徒は総合人間科と新教科の「国際コミュニケーション学」の授業とを、同じように評価しとらえていることがうかがえる。

さて、総合人間科と新教科の比較では、2005年度は「23学習の目的がはっきりしている(19%⇒35%⇒43%)」に増えた。生徒に国際コミュニケーション学の学習の目的が理解されてきたことが分かる。来年度への課題は、生徒の学びの視点に立ち、「国際コミュニケーション学」の学習内容を検討することと学習方法において「総合人間科」との違いをより鮮明にし、「国際コミュニケーション学」独自の学習方法とあり方を確立することである。

## (2)成果

- ・授業内容の精選が一層進み、合同授業の際、他グループの学習内容との関連性をより意識した授業ができた。また、振り返りの時間も確保できるようになった。
- ・宗教文化の授業内容についても、死後の世界や宇宙観について省き、宗教の基礎的な知識と宗教が及ぼす我々の生活規範や倫理道徳面への影響に絞ることができた。
- ・3グループ合同授業を行う時期に配慮し、外部講師による直接的な体験や講義の導入を効果的に実施することができた。
- ・美術の教科の視点から西洋と日本の文化(美観や自然観)の違いを理解させることができた。

## (3)今後の課題

- ① 授業の振り返りの時間を確保して、学習内容と生徒の実生活との接点を想起させ、自分自身の問題としてとらえ、実践につなげていく意欲と態度を育成する。

生徒の既存の知識との隔たりを埋めるために、ややもすると知識を与えるだけの一方的な授業になり、生徒の振り返りの時間が少なくなりがちである。授業の最後には必ず15分は時間をとり、自分の考えをまとめ発表させていきたい。また、振り返りの内容も「面白かった」・「ためになった」という簡単な感想に終わらないように、絶えず生徒自身の経験や知識に照らし合わせて、自分の思い込みを修正し、将来文化摩擦に直面した場合にどのように対処していくとよいかまでしっかりと追求させたい。

- ② 各国の宗教文化の授業をする前に、日本の宗教についての理解を十分図る。

宗教文化の学習内容として仏教・キリスト教・儒教について基礎的な知識を理解させる授業を設定したが、生徒の感想にしばしば述べられるように、様々な宗教の影響を受けている日本の宗教文化についての理解が不十分であった。宗教への関心が低い日本人にとって、自国の宗教文化を理解し、今現在の我々の倫理観や生活規範の中にどのように影響し根づいているか、改めて考え直し理解させていく必要がある。日本グループの授業の中では、自然崇拜・仏教・儒教・神道・武士道など、かなり詳しく扱っているものの、他のグループとの知識の共有には至っていない。宗教文化の学習のスタートとして3グループ合同授業で一番身近な日本の宗教文化をおさえ、他国の宗教文化との比較を進めるためのベースとしていきたい。

- ③ 日本の現状から、南米の国々とイスラム文化圏についての授業を考える。

現在、日本に就労する外国人として、南米（ブラジル・ペルー等）のラテン系の人々やパキスタン・イランなどのイスラム圏の人々が増加している。日本の生活の中に溶け込もうとするそれらの外国人と、受け入れる日本人との間の相互理解が不十分な面もあり、トラブルも頻繁に起きている。グローバル化が進み、今後ますます外国人との共生が重要になってくることが予想されるので、南米やイスラム文化圏についての理解を深めさせ、文化摩擦により発生する諸問題に対応する知識・態度・能力を育成していく必要がある。

④ 夏休みの課題について、受け入れる・溶け込むを人の交流に限定して出す。

夏休みに、日本・韓国・英米の3グループに「受け入れる・溶け込む」というテーマで課題を出して発表させている。しかし、今のところ文化面全般の交流について取り上げているため、それぞれのグループの発表が焦点化されず、文化の紹介や比較に終わっている面がある。コミュニケーションの授業としては、やはり人と人の関わりについて重点を置き、外国人と日本人が相互にいかに関わってきたか、いかに溶け込もうとしたかを理解させ、実践化につながる態度を身につけさせる必要がある。したがって、課題については、3グループの発表会や討論会を見越して人の交流にテーマを絞った方が良いでしょう。ただし、そのためには、実際に交流している外国人や日本人の生の声を聞きとり調査する必要があり、その機会を保障することが今後の課題となる。